

カール・ツックマイヤーの戯曲『悪魔の将軍』の改訂に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20744

カール・ツックマイヤーの戯曲『悪魔の将軍』の 改訂に関する考察

Die Betrachtung über die neue Fassung von Carl Zuckmayers Drama „Des Teufels General”

博士後期課程 独文学専攻 2017年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

本稿は、これまでほとんど問題視されてこなかった戯曲『悪魔の将軍』の改訂の理由について考察するものである。

ツックマイヤーは、1946年に初演を迎えたこの作品を1963年に上演禁止とし、その三年後に改訂版を発表するのである。改訂の背景には、1960年代の西ドイツで起きた学生運動や新左翼の活動、元ナチス党員の犯罪責任を問う裁判が関係する。この作家が、当時の社会情勢の中でドイツの若者たちに期待と希望を抱き、それをどう改訂に反映させたのかを確認することから始める。そこから見えてきた改訂の理由には、ツックマイヤーがアメリカに亡命していた頃に行った活動が関係していたと考えられる。亡命中に作成した『機密報告書』が明るみに出ることを恐れ、若者が抱き始めた反米感情を失速させるために、改訂版で「悪の根源はヒトラー」であることを強調するのであった。

第二次世界大戦後のドイツ文壇を支える作品の一つとなった『悪魔の将軍』の改訂を考察することは、今後のツックマイヤー研究を発展させるうえで非常に意義のあることであるとわかった。そして本稿が導き出した改訂の理由は、戯曲作家及びドイツ人としてのツックマイヤーの精神を推し量る上で極めて重要な視点となろう。

【キーワード】 ナチスの犯罪、元ナチス党員、ナチスの抵抗勢力、学生運動、新左翼

序章

カール・ツックマイヤーは、アメリカ亡命中に執筆した戯曲『悪魔の将軍』の初演を1946年12月14日にチューリッヒで迎えることができた。そして一年後からは、米仏英の三ヶ国が統治するドイツ西側地域での上演も可能となった¹。作品は予想以上の反響を呼び、ツックマイヤーを交えた討論会がドイツ各地で行われるようになる。特に、芸術だけではなく時事問題にも関心を向けていた若者が積極的に参加した。その若者の多くは、元ドイツ兵や軍事会議で有罪になり懲罰部隊に送られた者、ナチスに抵抗していた者であった。彼らは作品を介して、自分たちが抱える問題の核心部分と向き合っていた²。

ところが1963年の春、ツックマイヤーはバーデン・バーデンで予定されていた上演を中止させ、第三幕を中心に改訂した版での上演を1966年/1967年のシーズンから解禁する。作家の説明によると、「様々な内政の出来事と昨年の論争³」及び「作品がある種の扇動的な作品として誤解されることを恐れた⁴」ことが理由である。前者の「内政の出来事と昨年の論争」とは、1961年4月にイスラエルで始まったアイヒマン裁判と元ナチス党員（以下元党員）の犯罪追及をする動き（1963年12月に始まるフランクフルト-アウシュヴィッツ裁判に繋がる）を指し、後者の「扇動的な作品として誤解」とは、観客が作中の抵抗勢力をまねて暴動を起こすことを懸念したことを言っているのである。1946年の初演直後に遡ると、当時アメリカをはじめとする各国進駐軍は『悪魔の将軍』をドイツ国内で上演することを禁止していた⁵。それは、第一次世界大戦におけるドイツの敗北が、戦線に出ない国民の裏切りによるものであるというドイツ軍の擁護論が根拠であった。『悪魔の将軍』がそれと同様の擁護論を助長するのではないか、将軍と将校の美化、反逆、騒動、暴動を促すのではなかろうかと懸念したことに加え、ドイツを民主化するために国民に対して施している再教育に適していないと判断したからである。だが、今回はツックマイヤー自身が、作品をきっかけとした暴動が生じることを恐れて上演を禁止したのであった。確かに1960年代は学生運動や左翼的活動が活発な時期であり、作品から影響を受ける大衆が現れる可能性は大きかった。ツックマイヤーが、自身の作品がきっかけとなり学生たちの活動に拍車がかかることを恐れたことは

¹ Katrin Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, Marburg: Tectum Verlag, 2004, S. 27.

² Gunther Nickel/Ulrike Weiß, Carl Zuckmayer 1896-1977 „Ich wollte nur Theater machen“ (Marbacher Katalog 49), Stuttgart: Deutsche Schillergesellschaft Marbach am Neckar, 1996, S. 345.

³ Carl Zuckmayer, „Des Teufels General“. Eine Erklärung. In: Neue Züricher Zeitung (23. März 1963). In: Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 67.

⁴ Ebd..

⁵ Jang-Weon Seo, Die Darstellung der Rückkehr, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2004, S. 46.

そこでツックマイヤーは、チューリッヒに住んでいた演出家のヒルベルトと連絡を取り、チューリッヒで上演できるよう手配を頼んだ。その結果、1946年12月16日にチューリッヒで初演を迎えることができた。そして一年後、西側三カ国統治地域での上演も実現するのであった。Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 27.

推測できる。ツックマイヤーの上演禁止の決断に当惑した新聞社は、今まで指摘されてきた多くの問題点は既に論議され、説明されてきたのであるから、いまさら上演を禁止するのはおかしいのではないかと疑問を投げた⁶。

1960年代の西ドイツでは学生運動や新左翼の活動、元黨員への犯罪責任を問う裁判があったという視点からも禁止にした理由が見えてくる。1960年代のドイツの社会状況や、作品に関する討論会で得た作品のキーマンであるオーデルブルッフに対する批判の声を基にツックマイヤーは上演を禁じ、後に第三幕における主人公ハラスとその運転手であるコリアンケの会話、そして作品の中核であるハラスとオーデルブルッフの会話を改訂した版での上演を許すのであった。

『悪魔の将軍』に関する幾多の先行研究の中で、1966年の改訂について詳しく論じた研究は殆ど無いと言える。そこで本稿では、初版と改訂版の比較、討論会の内容、作家のインタビュー内容、当時の社会情勢などを基にして、ツックマイヤーの過去の行動とオーデルブルッフに託した作家の思いを確認すると同時に、なぜ初版の『悪魔の将軍』を1963年に上演禁止にし、なぜ改訂版を1966年に発表したのか、その意図を探る。

第1章 ハラスとコリアンケの会話の改訂

第二次世界大戦後、ナチスの戦争責任を問う裁判が開かれ世界に衝撃を与えた。1945年11月のニュルンベルク裁判、そして、1961年4月からエルサレムで開廷されたアイヒマン裁判である。ドイツ占領下におけるヨーロッパのユダヤ人取締りの中心人物だったアドルフ・アイヒマン(1906-1962)が、1960年5月に逃亡先のアルゼンチンで捕らえられた。このアイヒマン裁判は、戦中戦後に生まれた世代に過去を批判的に見る意識を植え付けたはずだ。

そして2010年11月、アメリカ政府が作成した数十年におよぶ戦争犯罪人追跡調査に関する部外秘の公式記録によって、アメリカが元黨員の安全な住処になっていたことを認めたという記事がニューヨーク・タイムズに掲載された⁷。この記事によってアメリカ政府は、元黨員であることが明白となった者に対して手を打つことを殆どしていなかったことがついに明るみに出た。大戦中、ナチスから逃れるためにドイツやオーストリアから作家や知識人の多くが亡命したアメリカは、大戦後に元黨員の潜伏地と化していた。アメリカ政府が元黨員に対する措置を取らなかった背景には、米ソ冷戦が大きく関係する。ソ連と東ヨーロッパの共産主義諸国は、アメリカ政府に戦争犯罪容疑者の元黨員を裁判にかけられるよう引き渡しをして欲しいという正式な要請を幾度もしたが、受け入れられなかった⁸。アメリカ政府はソ連の情報を入手するために、新聞記事に取り上げられない

⁶ Joachim Kaiser, *Muß Harras heute schweigen? Zu Zuckmayers Aufführungsverbot seines Schauspiels „Des Teufels Genral“*. In: *Süddeutsche Zeitung* (20. März 1963). [Microfilm ed.]. Mikropress

⁷ エリック・リヒトブラウ「秘密文書によってアメリカ政府の元ナチス援助が明らかに」『ニューヨーク・タイムズ』(2010年11月14日)、リック・リヒトブラウ著、徳川家広訳『ナチスの楽園』(新潮社、2015)、360頁参照。

⁸ 同上、148頁参照。

限り元党員の国外追放に積極的ではなかったことに加え、入国管理局の上層部が元党員に全く興味がなかったことも、入国しやすい要因であった。その結果、元党員はアメリカへ逃げ込み、生活することができたのである⁹。

元党員がドイツから逃げ出す理由は、戦犯として裁かれることを避けるためだけではない。元党員を社会から追い払い、それ以外の人々によってドイツを再建させる「非ナチ化政策」にも原因があった。ナチとナチでなかった者を公式に区別する手続きが必要になると、ナチズムに心酔していたドイツ人は善いドイツ人になりすまして「非ナチ証明書」を手にした。重罪者たちは、何とかしてこの証明書を入手して海外逃亡したのである。ところが、冷戦が悪化して非ナチ化政策どころではなくなったアメリカ占領当局は、この手続きをドイツ人自身の管理下に移した。ドイツ人管理下の証明書発行は、国家の汚れた過去を洗い流す手段に変わってしまい、犯罪者であるなしにかかわらず誰であろうと「非ナチ」ということになった¹⁰。

以上のような冷戦構造の下、独米ソの三国の関係を汲んで改訂したと思われるのが、ハラスとコリアンケの会話である。場面は、ドイツ空軍内で起こっているサボタージュの真相解明のためハラスに与えられた猶予期間の最終日、軍事航空基地の技術室である。ハラスには、愛用機で海外へ逃亡する計画がある。しかし、ハラスは逃亡できたとしてもコリアンケは捕まり、戦場に送り出される。ハラスはコリアンケを案じるが、そうなった時は進んで東部戦線に志願すると断言するコリアンケに対してハラスは「お前は頭がおかしい」と呆れ、次のように会話が続く¹¹。

コリアンケ：そんなことないですよ、賭けましょうか、将軍殿。そんな頭は売りませんよーコーヒ一豆と引き換えでも。東部へーいつだって東部へ！どうにかしてそこへ行く。東部戦線で、歩哨の上で、真っ暗な真夜中にー（両手を挙げて）。「タワリシチ、タワリシチ！（同志たち、同志たち!）」って。もう言えるんです。

ハラス：お前は思うんだろう、その時に酸敗した牛乳から蜂蜜へ来たよ。なんてことだーただ、そこで長期留置にならなければいいが。

コ：かつてのスパルタクス団員、将軍殿。自分は1918年にもう KPD にいましたー。

ハ：ずいぶん経った。あー1918年か。当時俺は理想だけを抱いていたー外に。アメリカに。

コ：そこに理想を残すべきだったんですよ、将軍殿。

ハ：まあ良いさ。昔のことだ。

⁹ 同上、151頁参照。

¹⁰ 木佐芳男『〈戦争責任〉とは何か』（中央公論新社、2001）、108-111頁参照。

¹¹ Carl Zuckmayer, *Des Teufels General*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 130-131.

初版と改訂版の会話全体を比較のために参考資料として本稿末に添付する。以降の会話の引用も、参考資料を参照のこと。「初版」は Stockholm: Bermann-Fischer, Wien: Schönbrunn, 1947を、「改訂版」は Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996を原典としている。

この会話を通じてツックマイヤーは、自身が1918年当時は社会主義のシンパであったこと、後にアメリカに亡命したことを読者/観客に伝えていると考えられる。ツックマイヤーの社会主義的活動は、第一次世界大戦中に雑誌『行動 (Die Aktion)』の影響を受けたことによって始まる。1918年の11月革命の最中にこの雑誌で、発行人のフランツ・プフェムフェルト(1879-1954)らと共に、「国際的資本主義の幾つもの祖国は崩壊している」という言葉で始まる「反国家社会主義党グループドイツの声明 (Aufruf der Antinationalen Sozialistischen Partei (A. S. P.) Gruppe Deutschland)¹²」を発表した。これは第一次世界大戦の原因は資本主義経済の秩序にあると断言し、資本主義を敵視して社会主義による世界革命を目指すという声明である。ドイツ共産党 (Kommunistische Partei Deutschlands, KPD) は、1915年にドイツ社会民主党内左派のマルクス主義者たちによって立ち上げられた政治団体「スパルタクス団」が、1918年12月に社会党から正式に分離して成立した。ハラスとコリアンケの会話では、マルクス主義やスパルタクス団について言及してはいるが、労働者に呼び掛け、暴力ではなく労働力の組織化をすることで社会主義を築いていこうという点に、過去にツックマイヤーが傾倒していた思想との共通点が見られる。そして、その思想がツックマイヤーにとっては既に過去のものであることもこの会話で断言している。

さらに、「そこに (アメリカに) 理想を残すべきだった」に注目すると、「今はアメリカを理想としていない」と解釈ができる。つまり、アメリカ政府と関係深いことは既に過去のことであり改訂版に記すこともツックマイヤーには重要であったと考えられるのではないだろうか。確かにアメリカ政府との結びつきがあったからこそツックマイヤーは早期に帰国できた。そして、民主主義の実現に向かう新たなドイツを築き上げるためにはアメリカが必要であるとするツックマイヤーは、アメリカ政府が行っているドイツの民主化政策をドイツ国民に理解してもらえよう努めていた。例えば、ドイツ国民が抱いているアメリカに対する先入観を取り払うために民主化を擁護した文章を書き¹³、戦後アメリカが設立したラジオ局で、ドイツ語の番組「アメリカの声 (Die Stimme Amerikas)¹⁴」でアナウンサーをするなど、非ナチ化政策を施すアメリカ政府に協力した。しかし、社会状況が変わった。アメリカ政府と結びつきが強いことよりも、帰国していることを強調すべきであると、ツックマイヤーは感じたにちがいない。前述したように、元黨員たちは非ナチの証明書を入手してアメリカに逃げるその一方、ヒトラーの政権掌握の後にドイツを離れていたマルクス主義の流れを受け継ぐフランクフルト学派のメンバーたちが帰国したのであった。学派メンバーの一人で、ナチスに協力した人々の心理を研究するテオドール・アドルノが1959年11月の講演で、「私は、民主主義に反するファシズムの傾向が生き続けていることよりも、民主主義の中にナ

¹² *Die Aktion*. 8 Jahrgang, Heft 45/46 (16. November 1918). [Nachdruck]. Mit Einführung und Kommentator von Paul Raabe, München: Kösel Verlag, 1967, S. 583-586.

¹³ Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 18.

¹⁴ Nickel/Weiß, „Ich wollte nur Theater machen“, a. a. O., S. 316.

毎日26ヶ国語で70番組以上放送していたラジオ局で、プロパガンダとして重要な役目を担っていた。

チズムが生き続けていることのほうが、潜在的にもっと恐ろしいと思う¹⁵」と述べた。するとその数週間後にケルンのシナゴグへの襲撃が起り、反ユダヤ主義が密かに続いていたことが証明された。すると若い世代は驚愕し、この学派に多大なる評価と信頼を寄せていった。さらに、社会心理学と心理分析の認識を「権威的人格」の中に統合している批判理論や世界解釈に「ニュー・レフト」を称する者たちも魅了されていく¹⁶。

学生や左翼の人々がフランクフルト学派に対して信望を篤く寄せているのを見たツックマイヤーは、「元党員はアメリカに逃げ、アメリカに亡命していた反ナチスは帰国すること」に対して、「帰国した者達は、自分も含め、祖国ドイツのために尽力していること」を確認させると同時に、KPDという言葉を会話に組み込むことで新左翼を理解していることも示唆した文壇の大家らしい改訂であると言えるだろう。

第2章 ハラスとオーデルブルッフの会話の改訂

1947年11月25日、フランクフルトでの上演が喝采と共に幕を降ろした。この様子を見たペーター・ズーアカンブによって最初の討論会が設けられことをきっかけに、ツックマイヤーはドイツ国内を巡り、作品を観た人々と意見交換をするようになる。『悪魔の将軍』を深く理解することで倫理性と政治的な視点を得た参加者は、各自が持つ過去を克服する糸口を見つける可能性も得た。

討論会では、舞台上でサボタージュを見せて新たな国内裏切り説を煽るような必要はあるのか、普遍妥当性を分かりやすくするためにナチスシンパの卑しい奴らの運命を劇化したほうが良いのではないか、などの意見が挙がった¹⁷。「葛藤の象徴」、「サボタージュの具現化」として描かれたオーデルブルッフは、作品に対する多様な意見を引き出す存在になっていた。それと同時に多くの人にとって、特に若者であるが、オーデルブルッフは自分自身と重ねることができない登場人物でもあった。とある討論会で、「目的を達成するためなら、どの様な手段も聖なるものであり、そしてその結果、仲間の多くを死に追いやっても良いのか¹⁸」というオーデルブルッフに関する質問を受けたツックマイヤーは、「抵抗勢力の英雄ではなく、葛藤する技術者を描いた¹⁹」と回答した。1955年にヘルムート・コイトナー (Helmut Käutner, 1908-1980) によって『悪魔の将軍』が映画化されると、作品に関心を持つドイツ国民はさらに増えた。しかし、目的を達成するために仲間が犠牲になっても仕方がないというオーデルブルッフの信念に関しては、十分な理解を得ることができなかった。

¹⁵ Theodor W. Adorno, *Eingriffe. Neun kritische Modelle*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1963, S. 126.

¹⁶ ノルベルト・フライ著、下村由一訳『1968年反乱のグローバリズム』（みすず書房、2012）、91頁参照。

¹⁷ Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 54.

¹⁸ Bruno E. Werner, *Hoffnungslose Jugend?* In: *Die Neue Zeitung* (7. März 1948). In: Nickel/Weiß, „Ich wollte nur Theater machen“, a. a. O., S. 346-347.

¹⁹ Ebd..

1950年代になると、西ドイツの若者たちは親世代と断絶していた。家族内の暗黙の了解として過去については語らない雰囲気があり、親子の対話が成立しないこともあった。さらに、大学でナチスをテーマに取り上げて「第三帝国」を批判的に論じることは、とりわけ正教授の多くの過去を問うことになり歓迎されなかった。しかし、学生は歴史と政治に関心を持っていた。大学における学習や研究によってインテリとしての理論や理想を形成し、社会への批判を抱き始めると、ナチスに対する批判やナチスに関わっていた大人たちに対する学生の不満は、徐々に学生運動へと発展していった²⁰。その最中、ドイツ国民のナチスに関する意識を高め、ドイツ人の歴史認識の大きな転換点となるアウシュヴィッツ裁判が、アイヒマン裁判から二年経った1963年12月からフランクフルトで始まる。この裁判の最大の意義は、ナチスの犯罪追及を諦めなかったドイツ人たちが過去と対峙し、自分たちの手でナチスの犯罪を裁き、さらにナチスの残虐行為の細部を社会に広く知らせたことにある。戦後十数年が経ち経済復興の波に乗る西ドイツでは、ナチスの蛮行に加担した多くの人々が自分の行為を誤魔化し、何ら罪に問われることなく平然と社会に溶け込んで一般市民として生活していた²¹。ツックマイヤーは改訂版で、「敵は一把握できません。敵は至る所にいます—我々国民の中に—我々身内に²²」と、抵抗者オーデルブルッフに語らせた。ニュルンベルク裁判やアイヒマン裁判とは違い、非ナチスとして生活している元党員のドイツ人をドイツ人自らが見つけて判決を下すこの裁判に、ツックマイヤーも注目していたと考えられる。

元党員を逃がそうとしないこの裁判の信念は、ナチスとは関係のない市民を巻き込む可能性がある。たとえそうであったとしても、この裁判を最後まで続ける意義があるとツックマイヤーは考えていたのではないだろうか。そのことは、オーデルブルッフの次の言葉から想像できる。

オーデルブルッフ：「…」まだ一つだけ我々に残されています。武器を壊さねばならないということです。その武器で、敵は勝利を収めることができます—たとえ、我々自身に命中したとしても。もし敵が勝ってしまったなら、ハラス、—もしヒトラーがこの戦争で勝利を収めるならば、—その場合、ドイツは無くなっています。その場合、世界は無くなっているのです²³。

この言葉を聞いたハラスは、「外国による支配か。新たな暴力か—それとも新たな隷属なのか²⁴」と、何が敗北なのかを考えたことがあるのかオーデルブルッフに問う。するとオーデルブルッフは、自分たち自身の手でナチスの行いを払拭しないことが敗北であると答えるのである。

²⁰ フライ著、下村訳（みすず書房、2012）、76-79頁参照。

²¹ 芝健介『ニュルンベルク裁判』（岩波書店、2015）、262-268頁参照。

²² Zuckmayer, *Des Teufels General*, a. a. O., S. 149.

²³ Ebd..

²⁴ Ebd..

オーデルブルッフ：「…」我々を支配しているもの、今、ここで今日—我々すべてを下僕にするものは、そしてもっと悪い、つまり、たとえ我々が目を閉じたとしても、日常的に我々の目の前で起きている犯罪の補助者や共犯者にするものは、これは、ハラス、—これは長く続くでしょう。我々が生きている間も、墓に入ってからもなお、—我々が、自分たちの手でこの罪を払拭する場合を除いては²⁵。

オーデルブルッフが抵抗者となったのは、祖国がナチスによって間違った方向に導かれることで、「自分がドイツ人であることが恥ずかなくなった²⁶」ことが理由であると打ち明けている。この言葉は、1932年7月の選挙でナチが第一党になり、その後ヒトラーが権力を握ったことを示唆しているのではないだろうか。ナチス党を選んだことで国を悪の方向に向かわせたのがドイツ人であるならば、国を善に向かわせるように方向を変えることはドイツ人の責任である。批判されているオーデルブルッフの行動は、ドイツ人として責任があることを示したもので、決して間違った行動ではないことをツックマイヤーは改訂版で訴え、理解を求めたのであろう。

さらにツックマイヤーは、「オーデルブルッフは共謀者ではなく、正真正銘の抵抗者である。ドイツの勝利が悪魔の存在を持続することだと気づいたオーデルブルッフは、仕方なく自分の民族や親友たちと戦わなければならなくなった。そのことによって絶望感を抱いて生きている²⁷」ことをオーデルブルッフの特徴として語っている。作者の思いは、「カインが世界を良くしたのか、アベルを殴り殺した時に²⁸」とハラスに言われたオーデルブルッフが、仲間である大佐アイラースを死に至らしめたことで葛藤に苦しみ、言葉を詰まらせながら次のように答えた改訂版で丁寧に伝えられている。

オーデルブルッフ：我々は、無意味な大量破壊を目的にしている戦闘力を弱めたかった。ドイツを解放するために他に方法は無かったのです。我々は、武器を使い物にならないようにしたかった—武器を扱っている者を死に至らすつもりはなかったのです。「…」私は終わりにしたかった、自殺でもって。私はまだ生きています、戦うことを諦めてはいけなからです。ドイツのために、ハラス²⁹。

上演後にドイツ各地で行われた討論会において、オーデルブルッフの信念に対して多くの議論を起こした初版のオーデルブルッフは、ナチスに抵抗する者の一人としてしか認識されかねない描写で

²⁵ Ebd..

²⁶ Ebd., S. 151.

²⁷ Fred Hepp, *Diskussion mit Zuckmayer*. In: *Rheinischer Merkur* (13. März 1948). In: Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 60.

²⁸ Zuckmayer, *Des Teufels General*, a. a. O., S. 150.

²⁹ Ebd..

あった。そこでツックマイヤーはオーデルブルッフに明確な信念を持たせ、巨大勢力に果敢に立ち向かう抵抗者として描き直したことが改訂版に見て取れる。

しかし、ナチスを倒すことで抑圧から解放されることを信じてやまないオーデルブルッフの行動は、批判されたままであった。オーデルブルッフは「兄弟殺し」と言われても反論できない事態を起こしてしまったことより、敵を滅亡させる信念と仲間を亡くした無念の葛藤に苦しんでいる。自分の行動は全て正当であるなどとは決して考えていない、という様子は伝わって来る。だがそうであったとしても、仲間を死に追いやった行動を読者/観客に納得させるだけの言葉は、オーデルブルッフから発せられていない。その点を改訂版で補ったのがハラスの言葉である。ハラスは、オーデルブルッフの信念を認めつつ、目的を見誤っていることを正していく。初版におけるハラスは、新しい世代の未来にぼんやりとした展望を語り、抵抗勢力に理解を示したか否かについては曖昧であった。しかし、改訂版のハラスは、オーデルブルッフと互いに論じ合うことで抵抗勢力への理解を明白に示した。勢力の一員として共に戦うことをハラスは選ばなかったが、悪の根源はヒトラーであることを断言する。ハラスは、ナチス支配下のドイツを成長し続ける樹木と見立てた。枝葉である仲間たちを死に追いやるのは間違いであり、標的にするのは根幹であるヒトラーだけだと、ハラスはオーデルブルッフを論ずるのであった。

ハラス：「……」君たちがしたいことは正しい。だが、していることは間違っている。君たちは信じているのかね、枝先を切り落とすことで腐った木を倒すことができると。君たちは、根っこを抜かなくてはならない。根っこだよ、オーデルブルッフ。それは、フリードリヒ・アイラーズではない。根源は、つまりアドルフ・ヒトラーだ。—これ以上言う必要はないな³⁰。

初版をアメリカで執筆していた大戦中、亡命者であったツックマイヤーが作品にヒトラーの名を記すことは危険を伴うことであったはずだ。“Führer”や“Heil Hitler”という表記はあるがフルネームでの表記はなく、改訂版のクライマックスで初めて“Adolf Hitler”とハラスから発せられるのである。ナチスの発足から滅亡までを見続けた同時代人のツックマイヤーは、敗戦から十数年経っても根深く残っているナチス統治下の社会的慣習の痕跡を祖国ドイツから完全に消し去りたかったはずだ。ナチスの支配から抜け出していない状況を作り出した悪の根源がヒトラーであると作品を通じて再意識させることで、国民にドイツの再生を託したに他ならない。

³⁰ Ebd., S. 153.

第3章 改訂版が1966年に発表されたことに関する一考察

1966年/1967年のシーズンに、改訂版はハンブルク、フランクフルト、ベルリンなどで上演された。変更した箇所とその意図についてツックマイヤーは、「作品は全体的にほとんど変更しておらず、ハラスとオーデルブルッフによる幾つかの会話だけ意味を変えた。これで二人の考え方について観客に勘違いが起きることはもはや無いだろう³¹」と述べた。加えて、1967年1月にベルリンでの上演が間近に迫っている頃、次のようにインタビューに答えている。

当時（筆者注、1963年）は、ドイツが犯した政治的な罪を解決するための混乱期であった。アイヒマン裁判は世界に衝撃を与え、アウシュヴィッツ裁判が間もなく開かれる時期でもあった。状況が完全に変わり、時代が変化したことで『悪魔の將軍』が誤解を受けるのではないかと恐れていた。（中略）。観客は今日、私が思い描いているように、再び私の作品を受け入れてくれている。とりわけ若者が、そのことを明らかにしてくれている。若者が当時の出来事を人間らしく解釈してくれることが、私の望みだ³²。

ツックマイヤーは満を持して作品を書き直したようだが、「演出をしたハインツ・ヒルペルトと俳優たち、それに加えて上演したシラー劇場の功績に向けた称賛³³」、「ハラスが逃亡を試みたと解釈されかねない戦闘機で飛び立つ場面に、ツックマイヤーは手を加えておらず、人生を謳歌する男が描かれたままである印象を残すなど、作品の問題点を増加させた³⁴」、「ツックマイヤーは、今まで批判されていたことに対してその誤解を解くために書き直しているが、（ハラスの）栄光を称え、抵抗勢力の善きシンパとして描いたままである。もはやこの作品を上演させるべきではない³⁵」という厳しい評価が続いたのであった。

ところで、1963年3月に上演を禁止してから直ぐに改訂してその年のシーズンに上演を解禁することもできたはずなのであるが、なぜツックマイヤーは1966年に改訂版を発表したのだろうか。改訂版による上演についての劇評や先行研究はあるが、「なぜ1966年なのか」について触れているものは見当たらなかった。1925年の戯曲『楽しいブドウ畑』の大ヒット以来、大衆の心に訴え、かつ、大衆の期待に応える作品を発表し続けることで人気を確立したツックマイヤーであるから、大衆の行動に敏感であることを疑う余地は無かろう。1960年代の学生運動と新左翼の運動は

³¹ *Der Spiegel*, Nr. 1/2, 21. Jahrgang (2. Januar 1967), S. 68. [Microfilm ed.]. Research Publications

³² *Zuckmayers Interview*. In: *Welt am Sonntag* (22. Januar 1967). In: Mews, *Zuckmayer, Des Teufels General*, a. a. O., S. 16.

³³ Volker Klotz, *Endgültig beim Teufel*. In: *Frankfurter Rundschau* (3. Februar 1967). In: Mews, *Zuckmayer, Des Teufels General*, a. a. O., S. 71.

³⁴ *Bleibende Irritation*. In: *FAZ* (16. März 1967). In: Mews, *Zuckmayer, Des Teufels General*, a. a. O., S. 72.

³⁵ Friedrich Luft, *Gloriole für den Mitläufer*. In: *Die Welt* (24. Januar 1967) [Microfilm ed.]. Mikropress

1968年がピークであったが、一連の運動が激化する前に改訂版『悪魔の将軍』を発表しなかったに違いない。考えられる理由を三つ挙げたい。

一つは、作品を通じて若者の意識を変えることである。日々激化する学生運動により若者のパワーが強まり、抑制できない負の勢力になることをツックマイヤーは警戒したと考えられる。若者が怒りや不満をぶつける対象は親やその世代、大学そして政府であった。しかし、当時のドイツの社会状況を招いたのは紛れもなくヒトラーであることを、ツックマイヤーは若者たちに気付いて欲しいと願ったのだろう。1963年に初版の上演を禁止したと述べたが、それは収益のある劇場に対してだけで、アマチュア、特に学生による上演は許可していたのであった。この理由をツックマイヤーが明確に述べていない点をヴァイングランは指摘しているが、指摘に留まり自らの考えを述べていない³⁶。1948年6月の国際青年集会でツックマイヤーは、「ドイツの青年たちが墮落者でもなければ、病気でないし、救いようがない人間であるとも思わない。世界的規模で若者を助けるべきである。本や教材、留学、あるいはそれに準ずる方法で、物資だけではなく精神的な支援もすべきである³⁷」と演説し、思いつく限りの方法で若者のために全力を尽くしていこうと決心していた。演劇の意義を伝えるのは作家が書いたテキストだけではなく、演出家や俳優の技量も大きく関係する。観客がどのように反応するかは上演内容次第であると言っても過言ではない。そうであるからこそ、若者との信頼関係を築く活動をすでに始めていたツックマイヤーは、学生こそが作家の意図を正しく読み取る演出家と俳優であると確信し、上演を許可したのではなかろうか。

さらに、ツックマイヤーの若者への期待が現れているハラスとオーデルブルッフの会話が改訂版にある³⁸。

ハラス：考えたことがあるかね、何が敗北かを。外国による支配か。新たな暴力か—それとも
新たな隷属なのか

オーデルブルッフ：それは長く続きません。子どもたちは、そこで成長します、新たな世代、
彼らは自由でしょう。

ナチスが行った過去から目をそらすそうとする大人たちに対し、未来を担う若者たちは怯まずに対峙していく。かつてツックマイヤーは、「精神的な教義や原理を求めること、そしてはっきりとした決断、つまり、白か黒か、肯定か否定かを明言することは、今日の若者世代をよく表している。若者は、自分たちの周りに心の拠り所が無いことを示している³⁹」と語った。若者の多くが、正し

³⁶ Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 68.

³⁷ J.A., Diskussion der Weltjugend. Zuckmayer: „Wir müssen nach vorn sehen!“ In: Die Welt (15.05.1948). In: Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 63.

³⁸ Zuckmayer, Des Teufels General, a. a. O., S. 149.

³⁹ Bob, Die Jugend, Haras und Oderbruch. Diskussion in Steglitz um Zuckmayers „Des Teufels General“. In: Die Neue Zeitung (31. Juli 1948). [Microfilm ed.]. Bonn: Mikropress.

い道を示せばその通りに進み、世間の相互関係をきちんと理解できる能力と知識の両方を持ち合わせていることをツックマイヤーは気づいていた⁴⁰。だが実際、1960年代になると若者の抵抗は激しさを増していく。保守的な親世代と進歩的な若者が対立する状況で、ツックマイヤーは若者に期待すると同時に、危うさも感じたであろう。ドイツ再建には、若者のパワーが不可欠である。若者と年配者が一丸となって取り組むことが最重要であることを、若者に訴える作品に仕上げたと言えよう。

改訂版の発表時期を決めた二つ目の理由として、ツックマイヤーがアメリカで行っていた極秘任務が知られないよう保身を図ったことが考えられる。1960年代にアメリカやイギリスを中心に若者の間で「カウンターカルチャー」が広まった。1955年から始まったベトナム戦争では、アメリカは自国の軍を戦場に送った。当時首相であったブラントは、西ドイツに駐留しているアメリカ軍を減らさないで欲しいとアメリカ政府に要求している。西ドイツにおけるアメリカの軍事力が弱くなったならば、西ベルリンが危険に晒される可能性が高いからである。カウンターカルチャーはドイツの若者にも影響を与え、西ベルリンの学生の抗議がベトナムで残虐行為を繰り返すアメリカを非難する反戦運動へと発展し始めた。西ドイツの市民は、アメリカが西ドイツを守っていることを理解しているので、学生らが反ベトナム戦争を唱えていてもそれに加担することはなかった⁴¹。しかし、亡命中にアメリカ政府に協力して、ナチス支配下のドイツに留まっているおよそ150名のドイツ人について記した『機密報告書 (Geheimreport)』を作成していたツックマイヤーは、アメリカを非難する若者の活動に冷静ではいられなかったはずだ。生前ツックマイヤーは、この報告書について一言も口にしなかった。彼の遺稿から見つかった資料によって、亡命中に報告書を作成していた事が明らかになったのであるが、若者たちの反米運動を発端にこの報告書の存在が知られてしまう可能性をツックマイヤーは恐れていたにちがいない。若者の反米感情は、ツックマイヤーに相当の危機感を与えていたはずである。この報告書が明るみに出ないように、若者の反米感情を失速させるために、「悪の根源はヒトラーである」、「敵はアメリカではなくヒトラーである」ことに意識を向けさせるための一つの手段が、改訂版であったと考えられるのである。

最後に挙げる理由は、1966年12月27日にツックマイヤーが七十歳を迎えることである。そこで、1966年に発表しようと思ったにちがいない。ツックマイヤーの目的は、作品を国民に観てもらい、国民の目を再度ヒトラーの悪事に向けさせることにある。マス・メディアに精通したツックマイヤーは改訂版『悪魔の将軍』に注目が集まる絶好の機会を逃すはずがない。ツックマイヤーが初版を執筆した時、作品の大半を占める第一幕をわずか二週間で書き上げたのだから、改訂した箇所を見る限り（添付資料参照のこと）、三年半も費やす必要がない。この時期に自叙伝『私の一部であるかのように (Als wär's ein Stück von mir)』(1966)も並行して執筆していたことを考慮しても、

⁴⁰ Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, a. a. O., S. 64.

⁴¹ 永井清彦「西ドイツの社会と混迷する学生運動」『現代の理論』(77) (現代の理論社, 1970), 70-82頁参照。

初版の上演禁止から改訂版の発表までの三年半という期間は長すぎる。注目を浴びるためにメディアを利用し、1966/1967年のシーズンに上演することを狙っていたことは十分に考えられる。実際、自叙伝はベストセラーになりドイツ国内で話題を呼んだ⁴²。そして12月27日の誕生日にスイス中部の街ルツェルンで、市長とS. フィッシャー社が主宰となり、ドイツとオーストリアから120名を招待する大規模なパーティが開催された⁴³。さらに年が明けて1月1日に誕生日を祝うラジオ番組が放送されるなど⁴⁴、改訂版を周知させる最高の時期であったことは間違いない。また、自叙伝の発行や改訂版の発表だけではなく、1966年にスイス国籍を取得したツックマイヤーを別の視点から考慮すると、七十歳が彼にとって特別な年齢であったことに気が付く。ツックマイヤーの日記に、「(1943年) 9月9日 ラインハルト誕生日」、「10月29日 ラインハルト死去」、そして「(1944年) 9月9日 ラインハルトの七十歳から一年」と、親友のマックス・ラインハルトの七十歳に関する事項も綴られていることから、重要な年齢であると言えよう⁴⁵。これはカトリック教徒であるツックマイヤーが、旧約聖書的一篇から影響を受けていたと考えられる。

我々の人生は七十年続く、せいぜい八十年というところだろう。人生が苦難と空虚であったことを誇りに思う。なぜなら瞬時に過ぎ去るし、我々は速やかに去っていく⁴⁶。

ツックマイヤーは1977年1月18日に八十歳で亡くなるのであるが、七十歳を節目と思いながら人生を歩んでいたのだろう。そうであるからこそ、自叙伝の出版、『悪魔の将軍』の改訂版発表、スイス国籍取得といった自分史に刻まれるべき大きな出来事が、1966年であってことは決して偶然ではない。

⁴² 1966年10月17日から1967年3月28日、6月12日から7月16日の全37週間販売数1位。ちなみに1967年3月29日から6月11日の販売1位はKonrad Adenauer *Erinnerungen 1953-1955*。

Die Spiegel- Bestsellerliste, Liste der meistverkauften Sachbücher in Deutschland.

URL:https://de.wikipedia.org/wiki/Liste_der_meistverkauften_Sachb%C3%BCcher_in_Deutschland#1961_ff (abgerufen am 19. September 2019)

ツックマイヤーの自叙伝の原題は *Als wär's ein Stück von mir* であるが、このタイトルはルートヴィヒ・ウーラント (Ludwig Uhland, 1787-1862) の詩「私には一人の戦友がいた (*Ich hatt' einen Kameraden*)」(1809)の第二連最終行から引用している。ツックマイヤー自身が第一次世界大戦に兵士として戦った実体験があることから、このタイトルを付けたのであろう。ドイツで行われる兵士を称え偲ぶ式典では、しばしばこの詩が歌われる。ドイツ国民の良心に訴えかける力がこの詩にはあり、国民が手にとる一冊になったのかもしれない。参考資料参照。

⁴³ Rainer Litten, *Von mir wird man noch hören...*. In: *Zürcher Woche* (30. Dezember 1966).

⁴⁴ *Die Geburtstagsfeier Carl Zuckmayers im Radio*. In: *Luzerner Tagblatt* (29. Dezember 1966).

⁴⁵ *Carl Zuckmayers Tagebuch 1942-1946*, (Deutsche Literaturarchiv, Nachlaß Carl Zuckmayer).

この資料は「明治大学大学院2018年度海外研究プログラム」に採択され、その助成金により訪問したドイツ文学史料保管所で閲覧することができた。

⁴⁶ Psalm 90:10. Unser Leben währt siebzig Jahre, und wenn es hoch kommt, so sind's achtzig Jahre; und worauf man stolz ist, das war Mühsal und Nichtigkeit, denn schnell enteilt es, und wir fliegen dahin.

終章

『悪魔の将軍』が1947年にドイツで初演を迎えた後、ツックマイヤーは若者と信頼関係を築くために思いつく限りの方法で彼らを支援した⁴⁷。また、新しい国家を築く援助にも積極的に協力し、『悪魔の将軍』を観た人が正しいことを見つける意欲を抱いてくれたならば、作品を書き上げたことは幸せなことである⁴⁸と述べた。だが、戦後世代の人々も改訂された作品に関心を示したものの、劇評が示すように戦後の全盛期ほど反響はなかった。ツックマイヤーもその点に気付いていた。神学者のカール・バルト（Karl Barth, 1886–1968）に宛てた1968年6月5日付の手紙で、前年のベルリン上演の感想を綴っている。

『悪魔の将軍』は若者たちの心を掴み、今日もベルリンで上演されています。しかし、この作品が二十年前に持っていた時事性は失われてしまいました。当時の生き活きとした政治的な風刺や鋭い痛烈さは、現在では理解され難いです⁴⁹。

1947年の討論会からオーデルブルッフに対する否定的な意見が挙がっていたにもかかわらず、1963年に上演を禁止し、1966年に改訂版での上演を解禁したツックマイヤーの判断に、国民は明らかに賛成しなかったと言えよう。ヒトラーの独裁が終焉し他国軍が駐留する中で、国民は試行錯誤で国家再建を続けた。そのような社会状況であったからこそ、国民は亡命先から戻って来た作家に指導的な態度を示すことを欲していたはずだ。だが、討論会を重ねたにもかかわらず改訂するまでに多くの時間を費やしてしまったツックマイヤーは、国民の期待に応えられなかったと言える。その一方で文学評論家のマルセル・ライヒ＝ラニツキ（Marcel Reich-Ranicki, 1920–2013）は、文学界におけるツックマイヤーの役割について肯定的な評価を残している。

ツックマイヤーが忘れられているというのは正しくない。確か私は、（かつて記事に）今日ツックマイヤーが過小評価されていると書いた。我々は、当時成功した二つの作品『ケーペニックの大尉』と『悪魔の将軍』、そして幾つかの注目すべき物語から恩恵を受けている。ツックマイヤーの立場は複雑である。なぜなら、しばしば批評家たちからは大衆的であるとみなされ、大衆からは批判的だとみなされることがあったからだ。そして、左派からは保守的である、保守派からは左派的とみなされていた。ツックマイヤーは、あらゆる派閥や立場に身を置いていた。だがそれは、作家にとって悪い状況ではない⁵⁰。

⁴⁷ J.A., *Diskussion der Weltjugend*. In: Weingran, „Des Teufels General” in der Diskussion, a. a. O., S. 63.

⁴⁸ Hepp, *Diskussion mit Zuckmayer*. In: *Rheinischer Merkur* (13. März 1948). In: Weingran, „Des Teufels General” in der Diskussion, a. a. O., S. 64.

⁴⁹ Carl Zuckmayer/Karl Barth, *Späte Freundschaft in Briefen*, Zürich: Theologischer, 1978, S. 64.

第一次世界大戦中は社会主義的思想を持ち、ナチスが台頭すると反ナチスを宣言してアメリカに亡命した。第二次世界大戦後に帰国するも、アメリカへの協力を続けていた。文学作品においては、表現主義が主流であればその潮流に、それに陰りがみえると新即物主義の作品を執筆する。ツックマイヤーと同時代に活躍したブレヒトと比較する文章を目にする機会は少なくない⁵¹。ブレヒトの作家としての一貫した姿勢に対して、時代の流行りに合わせるツックマイヤーのそれは優柔不断に見えるかもしれない。だがそれは、激変する世の中の最先端に居続けたいと願う作家として時代を読む能力が備わっていた証であり、ツックマイヤーの意地の現れであったのではなからうか。

『悪魔の将軍』は、現在もドイツで上演されている⁵²。そのことは、ツックマイヤーが忘れ去られた作家ではない証であり、改訂版が今なお受け入れられている証である。ドイツでは、政府、司法、教育機関、メディアなどが一体となってナチスの犯罪を糾弾し、犠牲者に追悼の意を表し、そして若い世代に事実を伝える努力を続けている。この精神がドイツ国民に刻まれている限り、ツックマイヤーが残したこの作品はこれからも上演され続ける。

⁵⁰ *Fragen Sie Reich-Ranicki*. In: *Frankfurter Allgemeine* (30. Mai 2006).

URL:<http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/fragen-sie-reich-ranicki/fragen-sie-reich-ranicki-ist-carl-zuckmayer-zu-unrecht-vergessen-1332423.html> (abgerufen am 19. September 2019)

⁵¹ 例えば、『世界の文学』54巻（中央公論社、1967）に掲載されている解説とその付録など。

⁵² 例えば、2019年7月5日、6日にデュッセルドルフで上演された。

URL:<https://www.f95.de/aktuell/news/profis/detail/24161-des-teufels-general-in-duesseldorf/73b30e50afd07e69939025f2284a1501/> (abgerufen am 19. September 2019)

【参考資料】1966年に発表された改訂箇所

< 第三幕 ハラスとコリアンケの会話 >

Erste Fassung

(Stockholm: Bermann-Fischer, Wien: Schönbrunn, 1947, S. 147.)

KORRIANKE: Kommt nicht in Frage, Herr General.
Im Falle eines Falles, da melde ick mir freiwillig zur Infanterie. Mit 'm nächsten Schub nach Osten.

HARRAS: Nach Osten? Du hast wohl 'n Furz im Kopp.

K.: Wetten, daß nein, Herr General? Det Köppchen vakoof ick nich — nicht für 'ne Kaffeebohne. Nach Osten — immer nach Osten! Da ha'ck 'n mächtgen Drang nach. Im Osten, auf Posten, in finstrer Mitternacht — (*Hebt die Hände.*) „Towarischtschi — Towarischtschi!“ Kann ick schon.

H.: Ich glaube — um dich muß ich mir keine Sorgen machen.

K.: Nein, Herr General.

(*Das Telephon schnarrt wieder.*)

コリアンケ: 問題にならないね、将軍殿。何か事が起こったら、すぐ歩兵に志願します。次の瞬間にはもう東部戦線へ。

ハラス: 東部へだと。お前は頭がおかしいようだな。

コ: そんなことないですよ、賭けましょうか、将軍殿。そんな頭は売りませんよ — コーヒー豆と引き換えでも。東部へ — いつだって東部へ! どうにかしてそこへ行く。東部戦線で、歩哨の上で、真っ暗な真夜中に — (両手を挙げて)。「タワリシチ、タワリシチ! (同志たち、同志たち!)」って。もう言えるんです。

ハ: どうやら — お前のことは心配する必要は無い様だな。

コ: そうですとも、将軍殿。

(再び電話が鳴る)

Neue Fassung

(Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 130-131.)

KORRIANKE: Kommt nicht in Frage, Herr General.
Im Falle eines Falles, da melde ick mir freiwillig zur Infanterie. Mitm nächsten Schub nach Osten.

HARRAS: Nach Osten? Du hast wohl 'n Furz im Kopp.

K.: Wetten, daß nein, Herr General? Det Köppchen vakoof ick nich — nicht für ne Kaffeebohne. Nach Osten — immer nach Osten! Da ha ick 'n mächtgen Drang nach. Im Osten, auf Posten, in finstrer Mitternacht — *Hebt die Hände.* „Towarischtschi — Towarischtschi!“ Kann ick schon.

H.: Du glaubst wohl, da kommst du aus der sauren Milch in den Honig? Mann — wenn du mal nur nicht drin kleben bleibst.

K.: Alter Spartakist, Herr General. Ick war doch schon 1918 in der KPD —

H.: Lange her. Mein Gott — 1918. Da hatte ich nur eine Idee — raus. Amerika.

K.: Da hättense man bleiben sollen, Herr General.

H.: Na ja. Lange her.

(*Das Telephon schnarrt wieder.*)

コリアンケ: 問題にならないね、将軍殿。何か事が起こったら、すぐ歩兵に志願します。次の瞬間にはもう東部戦線へ。

ハラス: 東部へだと。お前は頭がおかしいようだな。

コ: そんなことないですよ、賭けましょうか、将軍殿。そんな頭は売りませんよ — コーヒー豆と引き換えでも。東部へ — いつだって東部へ! どうにかしてそこへ行く。東部戦線で、歩哨の上で、真っ暗な真夜中に — (両手を挙げて)。「タワリシチ、タワリシチ! (同志たち、同志たち!)」って。もう言えるんです。

ハ: お前は思うんだろう、その時に酸敗した牛乳から蜂蜜へ来た。なんてことだ — ただ、そこで長期留置しなければいいが。

コ: かつてのスパルタクス団員、将軍殿。自分は1918年にもう KPD にいました —

ハ: ずいぶん経ったな。ああ — 1918年か。当時俺は理想ばかり抱いていた — 外に。アメリカに。

コ: そこに理想を残すべきだったんですよ、将軍殿。

ハ: まあいいさ。昔のことだ。

(再び電話が鳴る)

【参考資料】1966年に発表された改訂箇所

＜ 第三幕：ハラスとオーデルブルッフの会話 ＞

Erste Fassung

(Stockholm: Bermann-Fischer, Wien: Schönbrunn, 1947, S. 166-167.)

Harras: Und warum trifft ihr uns – aus dem Dunkel, aus dem Hinterhalt? Warum trifft ihr uns – anstatt des Feindes?

Oderbruch: Ihr seid seine Waffe. Die Waffe, mit der er siegen kann. Und wenn er siegt, Harras – wenn Deutschland in diesem Krieg siegt – dann ist Deutschland verloren. Dann ist die Welt verloren.

H.: Haben Sie bedacht, was Niederlage heißt? Fremdherrschaft? Neue Gewalt? Und neue Unterjochung?

O.: Es gibt keine Unterjochung, die nicht Befreiung wäre – für unser Volk.

H.: Ist denn kein anderer Weg – um Deutschland zu befreien?

O.: Wissen Sie einen anderen Weg?

H.: Wenn ich ihn wüßte – dann wüßten ihn Millionen.

O.: Das war die Antwort. Es ist kein anderer Weg. Wir brauchen die Niederlage. Wir dürsten nach Untergang. Wir müssen dazu helfen – mit eigener Hand. Nur dann können wir, gereinigt, auferstehen.

H.: Untergehn – das ist Gewißheit. Auf erstehn – das ist ein Traum.

O.: Nein. Ein Gesetz. Eins wie das andre. Ein Gesetz – ein Urteil. Beides gleich hart. Beides mit Blut geschrieben.

H.: Mit Freundesblut.

O.: Auch mit dem eignen.

Neue Fassung

(Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 149-150.)

Harras: Und warum trifft ihr uns – aus dem Dunkel, aus dem Hinterhalt? Warum trifft ihr uns – anstatt des Feindes?

Oderbruch: Der Feind – ist unfaßbar. Er steht überall – mitten in unsrem Volk – mitten in unseren Reihen. Wir selbst haben uns ihm ausgeliefert, damals, als der alte Marschall starb. Jetzt bleibt uns nur noch eins: wir müssen die Waffe zerbrechen, mit der er siegen kann – auch wenn es uns selber trifft. Denn wenn er siegt, Harras, – wenn Hitler diesen Krieg gewinnt, – dann ist Deutschland verloren. Dann ist die Welt verloren.

H.: Haben Sie bedacht, was Niederlage heißt? Fremdherrschaft? Neue Gewalt – und neue Unterjochung?

O.: Das dauert nicht. Es wachsen Kinder heran, neue Geschlechter, die werden frei sein. Was aber uns unterjocht, jetzt, hier und heute, – was uns alle zu Knechten macht, und schlimmer: zu Gehilfen, zu Mithelfern des Verbrechens, das täglich unter unseren Augen geschieht, auch wenn wir sie schließen, das, Harras, – das wird dauern, über unser Leben und unser Grab hinaus, – es sei denn, wir tilgen die Schuld, mit unsrer eigenen Hand.

H.: Die Schuld tilgen – durch neue Schuld? *Plötzlich fast schreiend* : Durch Blut – schlud? Mord? Brudermord?! *Wieder gefäßt* : Glaubt ihr, daß Kain die Welt besser machte, als er den Abel erschlug? *Wendet sich ab*.

O.: *schwer mit sich ringend, stockend* : Hören Sie mich an, Harras. Ich habe den Mord nicht gewollt. Ich hätte es nie für möglich gehalten, daß flugkranke Maschinen zum Einsatz kommen, ohne überprüft zu werden –

H.: Von wem? Da kennen Sie die Brüder schlecht. Denen kommt es doch nur auf die Meldung an, daß die Quote erfüllt ist. Sie mußten das wissen, Oderbruch.

O.: Wir wollten die Kampfkraft schwächen, der sinnlosen Schlächtereie ein Ziel setzen, weil es keinen anderen Weg gibt, um Deutschland zu befreien. Wir wollten die Waffe entschärfen, – nicht den Mann töten, der sie führt. In der Nacht, in der ich von Eilers' Tod erfuhr, wollte ich Schluß machen, mit mir selbst. Ich lebe nur noch, weil ich nicht aufgeben darf zu kämpfen. Für Deutschland, Harras.

H.: Sie denken zu kurz. Eine alte Freundin hat mir gesagt: eher schneide ich meine Wolljacken in Fetzen und verbrenne sie, als daß ich ein Stück für Hitlers Winterhilfe gebe. Weißt du nicht, habe ich sie gefragt, daß das Mord bedeutet, – solange ein Soldat in Rußland erfrieren kann?

O.: Dann müssen wir auch diese Schuld auf uns nehmen. Reinigung, – das ist unser Gesetz, und unser Urteil. Es ist mit Blut geschrieben.

H.: Mit Freundesblut.

O.: Auch mit dem eignen.

ハラス：なぜ君たちは、我々を狙ったのだ — 暗闇から、背後から。どうして我々を狙った — 敵の代わりに。

オーデルブルッフ：あなたたちは、敵の武器なのです。武器は、その武器で敵は勝ちます。そして、もし敵が勝ったのなら、ハラス — ドイツがこの戦争で勝利を取める時、 — その瞬間ドイツは無くなっているのです。その時、世界は無くなっているのです。

ハ：考えたことがあるのかね、何が敗北かを。外国による支配か。新たな暴力か。それとも新たな隷属なのか。

オ：隷属はありません、隷属が解放でないのならば — 我々国民にとって。

ハ：他の方法はないのかね — ドイツを解放するために。

オ：他の方法をご存じですか。

ハ：私がおその方法を知っているとしたら — おそらく何百万人もが知っているよ。

オ：それが答えだったのです。他の方法は無いのです。我々は敗北を渴望しています。我々は欲しているのです。我々は、その助けをしなければなりません — 自らの手で。その場合にのみ、我々はできるのです、浄化されて、立ち直ることが。

ハ：滅亡する — それははっきりしているな。立ち直る — それは夢だよ。

オ：違います。法なのです。同じ様なものです。法 — 判決。両方とも同じく厳しいものです。両方とも血で書かれているのです。

ハ：友人の血で。

オ：我々自身の血でもあります。

ハラス：なぜ君たちは、我々を狙ったのだ — 暗闇から、背後から。どうして我々を狙った — 敵の代わりに。

オーデルブルッフ：敵は — 把握できません。敵は至る所にいます — 我々国民の中に — 我々身内に。我々は、自ら敵に近づきました、老元帥が亡くなったあの時です。今は、まだ一つだけ我々に残されています。武器を壊さねばならないということです。その武器で、敵は勝利を取めることができます — たとえ、我々自身に命中したとしても。もし敵が勝ってしまったなら、ハラス、 — もしヒトラーがこの戦争で勝利を取めるのならば、 — その場合、ドイツは無くなっています。その場合、世界は無くなっているのです。

ハ：考えたことがあるのかね、何が敗北かを。外国による支配か。新たな暴力か — それとも新たな隷属なのか。

オ：それは長く続きません。子どもたちは、そこで成長します、新たな世代、彼らは自由でしょう。しかし、我々を支配しているもの、今、ここで今日 — 我々すべてを下僕にするものは、そしてもっと悪い、つまり、たとえ我々が目を閉じたとしても、日常的に我々の目の前で起きている犯罪の幫助者や共犯者にするものは、これは、ハラス、 — これは長く続くでしょう。我々が生きている間も、墓に入ってからもお、 — 我々が、自分たちの手でこの罪を払拭する場合は除いては。

ハ：罪の払拭か — 新たな罪で（突然まるで叫ぶかのよう）に。血の罪で。殺人で。兄弟殺しによって。（再び落ち着いて）考えてみたまえ、カインが世界を良くしたのか、アベルを殴り殺した時に。（向きを変える）

オ：（重苦しく、自らと格闘しながら、言葉に詰まりながら）私の話をよく聞いてください、ハラス。私は、殺人など望んではいませんでした。そんなことはあり得ないと思っていたのです、点検されることなく、不具合の飛行機が出動するとは —。

ハ：誰からだ。君は、仲間たちの不正を知っている。彼らにとって大事なのは、割り当てが達成されたという報告だけだ。君はそれをわかっていたにちがいない、オーデルブルッフ。

オ：我々は、無意味な大量破壊を目的にしている戦闘力を弱めたかった。ドイツを解放するために他に方法は無かったのです。我々は、武器を使い物にならないようにしたかった — 武器を扱っている者を死に至らすつもりはなかったのです。あの夜、私がアイラースの死を知った夜に、私は終わりにしたかった、自殺でもって。私はまだ生きています、戦うことを諦めてはいけませんから。ドイツのために、ハラス。

ハ：君はあまりにも短絡に考えている。昔の恋人が私に言っていたよ。私がウールのジャケット数着を裂いて燃やすことはあっても、ヒトラーの冬期貧民救済事業には一着も提供しない、とね。そこで、彼女に問いかけたんだ。兵士がロシアで凍死するかもしれない場合 — それは殺人に値するってことを知らないのかい、と。

オ：我々も責任を負わねばなりません。浄化 — それは我々の法であり、同時に判決でもあります。血で書かれているのです。

ハ：友人の血で。

オ：我々自身の血でもあります。

Erste Fassung
(Stockholm: Bermann-Fischer, Wien: Schönbrunn,
1947, S. 170-171.)

- H.: Was ist das Ewige Recht?
O.: Recht ist das unerbittlich waltende Gesetz – dem Geist, Natur und Leben unterworfen sind. Wenn es erfüllt wird – heißt es Freiheit.
H.: *nickt, schaut ihn an*: Noch eines, Oderbruch. Was für Lieder? Was für Lieder singt man denn bei euch? Sind es die alten – lang verklungenen? Die Lieder der unerfüllten Hoffnung – der verzweifelten Sehnsucht? Nach dem Tag des Ruhmes? Der letzten Schlacht? Der Sonne, die niemals aufgeht? Was für Lieder singt man bei euch?
O.: Man singt nicht in Katakomben.
H.: Man siegt nicht ohne Lieder.
O.: Wir wissen, daß wir den Sieg nicht sehen. Die aber nach uns kommen, die werden ihre eignen Lieder haben.
H.: Was für Lieder, Oderbruch?
O.: Neue Lieder. Menschliche Lieder. Göttliche Lieder.
H.: Ich danke Ihnen. Ich weiß jetzt genug. *Er nimmt die Feder, unterzeichnet den Bericht. Reicht sie Oderbruch*: Hier. Es ist besser, wir haben das in Ordnung. Besser für Sie. *Während Oderbruch unterschreibt* Ich muß noch – ich muß Sie noch um Verzeihung bitten, Oderbruch. Für eine Sekunde – eine böse Sekunde – habe ich an Ihnen gezweifelt. Jetzt ist mir leicht.

- ハ: 永遠の正義とは何かね。
オ: 正義とは、容赦なく機能している法です – その法に精神、自然、生命は隷属されています。それが満たされている時 – それが自由なのです。
ハ: (うなずいて、彼をじっと見つめる。) もう一つ、オーデルブルッフ。どんな歌なんだ。いったいどんな歌を君たちは歌っているんだ。それは古いものなのか – 長いこと忘れ去られているものかい。満たされない希望の歌 – 絶望の歌なのか、名誉の日を求める。最後の戦いの歌。二度と昇らぬ太陽の歌なのか。どんな歌を君たちは歌っているのかね。

オ: 地下墓地では歌いません。

- ハ: 歌なしに勝つことはない。
オ: 我々が勝利を見ないことは、わかっているのです。しかし、我々の後から来る者たちは、彼らは自分たちの歌を持つでしょう。
ハ: どんな歌をかね、オーデルブルッフ。
オ: 新しい歌です。人間の歌。神の歌です。
ハ: 感謝するよ。今、十分わかった。
(彼は羽ペンを取り、報告書にサインをする。オーデルブルッフにペンを差し出す) さあ。これで良い、きちんと処理できた。君にとっても。(オーデルブルッフがサインをしている間) まだ – まだ君に許してもらわないとならない、オーデルブルッフ。一瞬 – 嫌な一瞬だ – 君を疑ったんだ。今、気が楽になったよ。

Neue Fassung
(Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 153-154.)

- H.: Was ist das Ewige Recht?
O.: Recht ist das unerbittlich waltende Gesetz – dem Geist, Natur und Leben unterworfen sind. Wenn es erfüllt wird – heißt es Freiheit.
H.: Ich danke Ihnen. Ich weiß jetzt genug. Aber ich will Ihnen – etwas hinterlassen, Oderbruch. Kleines Testament, sozusagen. Was Sie wollen, ist recht. Was Sie tun, ist falsch. Glaubt ihr, man kann einen schlechten Baum fallen, indem man die Krone schlägt? Ihr müßt die Wurzel treffen! Die Wurzel, Oderbruch! Und die heißt nicht Friedrich Eilers. Sie heißt: Adolf Hitler. – Mehr brauche ich nicht zu sagen.
O.: Nein, General Harras. Mehr brauchen Sie nicht zu sagen.
H.: Dann ist es gut. *Er nimmt die Feder, unterzeichnet den Bericht. Reicht sie Oderbruch*: Hier. Es ist besser, wir haben das in Ordnung. Besser für Sie. *Während Oderbruch unterschreibt* Ich muß noch – ich muß Sie noch um Verzeihung bitten, Oderbruch. Für eine Sekunde – eine böse Sekunde – habe ich an Ihnen gezweifelt. Jetzt ist mir leicht.

- ハ: 永遠の正義とは何かね。
オ: 正義とは、容赦なく機能している法です – その法に精神、自然、生命は隷属されています。それが満たされている時 – それが自由なのです。
ハ: 感謝するよ。今、十分わかった。だが、私は君たちに – 何か残したい、オーデルブルッフ。ちょっとした遺言だ、言ってみれば。君たちがしたいことは正しい。だが、していることは間違っている。君たちは信じているのかね、枝先を切り落とすことで腐った木を倒すことができると。君たちは、根っこを抜かなくてはならない。根っこだよ、オーデルブルッフ。それは、フリードリヒ・アイラーズではない。根源は、つまりアドルフ・ヒトラーだ。 – これ以上言う必要はないな。
オ: その通りです、ハラス將軍。それ以上おっしゃる必要はありません。

- ハ: さて、それで結構だ。
(彼は羽ペンを取り、報告書にサインをする。オーデルブルッフにペンを差し出す) さあ。これで良い、きちんと処理できた。君にとっても。(オーデルブルッフがサインをしている間) まだ – まだ君に許してもらわないとならない、オーデルブルッフ。一瞬 – 嫌な一瞬だ – 君を疑ったんだ。今、気が楽になったよ。

【参考資料】 Ludwig Uhland : *Ich hatt' einen Kameraden*

ツックマイヤーが1966年に出版した自叙伝『私の一部であるかのように („Als wär's ein Stück von mir")』は、ルートヴィヒ・ウーラント (1787-1862)の詩「私には一人の戦友がいた」(1809)の第二連最終行をタイトルにしている。

Ich hatt' einen Kameraden

私には一人の戦友がいた

Ich hatt' einen Kameraden,

私には一人の戦友がいた、

Einen bessern findest du nit.

君以上の善き戦友は見つからない。

Die Trommel schlug zum Streite,

突撃の太鼓がなった、

Er ging an meiner Seite

彼は私の横を歩いた

In gleichem Schritt und Tritt.

歩調を合わせて

Eine Kugel kam geflogen,

弾丸が一発飛んできた、

Gilt's mir oder gilt es dir?

私に向けてか、君に向けてか。

Ihn hat es weggerissen,

彼の命を奪った、

Er liegt vor meinen Füßen,

彼は私の足元で横たわっている、

Als wär's ein Stück von mir.

私の一部であるかのように。

Will mir die Hand noch reichen,

私にまだ手を伸ばそうとしている、

Derweil ich eben lad.

私がちょうど弾を詰めている間に。

Kann dir die Hand nicht geben,

君に手を差し伸べられない、

Bleib du im ew'gen Leben

永遠の生に在り続けてくれ

Mein guter Kamerad!

私の善き戦友として！